
Clover Friends

クロちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Clover Friends

【Nコード】

N3286F

【作者名】

クロちゃん

【あらすじ】

田舎からでてきたよくいる新大学生立川健治いよいよ大学新学期を迎えたのですが、寝坊をしてしまい教授との懇親会へギリギリで間に合うことに成功と思いきや思いも寄らないハプニングが、青春の甘さと苦さを笑いあり涙ありでおおくりする。けんぼう成長記です。けんぼうの出会いささまざまな人物にも注目してください

第一話 春風に乗って

青春とはどう香りなんだろう。クンクン

あの空の向こうにはなにが待っているんだろう。

沢山の期待を胸にこの春上京してきた僕の心の中は初めて巣から飛び出た小鳥のようだった。

僕がこの大学ですごした時間は僕に掛け替えのない仲間をくれました

一生忘れられない青春の日々と一緒に……。

僕は（18）才

立川健治

地元じゃ

けんちゃんやけんぼうと呼ばれてました。

（ありきたり）

今年、念願の東京の大学合格し、ようやく古くさい田舎から出ることができた。新宿渋谷六本木東京タワーにお台場行きところは沢

山ある芸能人にも会えたらな・・・。
そして、できれば運命の人にも会いたいな。

今日から新学期大学にも全然なれてないし、こないだの入学式でも横の奴に

「どっから来たの？」という質問に

「えっと家から」と答えてしまい当然相手は

「えっ？そっか家か・・・。」とかなり引き気味。その時は全然きづかなかったんだけど、あとから

「やべ、あれは出身地を聞かれてたんだ」

ってな感じて軽くぼけてしまうサプライズ。

こんなちよつと口下手で、ときどき何言ってるか分からないと言われてしまう僕ですが、こんな自分を直すべく大学ではイメチェンを決め込もうと努力していきたいと考えているのかいないのか。未だに何にもしていない今日この頃。ちちち

ちちちち

ちちちち

「はいはい起きればいいんだろ」

・・・0900

。

「やべー遅刻」

ダーシュ

これでも足には自身があつて高校の時には県総体で準優勝ですよ。
(上位の人が奇跡の集団食中毒だったんすけどね)

「はいセーフ」

教授との懇親会の教室のある建物まで来てなんとか間に合つたと確信した次の瞬間

ドン

「すみません」

「えー」

誰が後ろから当たってきて鞆中の物が大運河をなして階段から雪崩のように谷底へ真つ逆さま。その時確信した

「もう間に合わない」

「キーンコンカーンコン」

くそーほんとに間に合つたのに何でこんなことになんでー。

当たってきた奴はどこかに消えてしまい、新学期そうそうの遅刻という大失態に途方に暮れる僕になびく春風に残っていたのは淡い香水の香りだけだった。

第二話 雨の中の出会

カラン

『喫茶店フルムーン』

「ただいま」

「おっ健おかえり」

元氣なく帰ってきたこの場所はとうさんの兄貴の立川誠（49）（僕はまこちゃんってよんでるんだけどね）の喫茶店だ。春からこの喫茶店で店の手伝いをしながら住み込みで生活してるんだけど、ぼくが東京に出てこれたのもこの喫茶店あったることだった。

「けんちゃん、どうした元氣ないぞー」

この人はまこちゃんの奥さんの清香さん。この人にとってはも若くてまこちゃんとは年の差結婚、ただいま（32）歳なんだって、僕が目には25歳くらいにしか見えないんだけどね。

「いやーね新学期早々遅刻しちゃってゼミの教授に怒られちゃったんだよね」

清香さんはニコニコして

「だって、けんちゃん全然おきないだもん」

「清香さんのイジワル。起こしてくれよ」

優しい清香さんの笑顔と喫茶店に広がるコーヒーの香りは僕の心を癒してくれた。そんなとき、まこちゃんも呆れながら笑いコーヒー豆を煎っていた

「健今日も駅に行くのか」

「あー今日は迷ってる。天気悪そうだしさ」

「まいったな駅の近くにコーヒー豆の専門店があるんだけど、そこまで豆を買ってきて欲しいんだ。いつも配達してもらってるんだけど今日はお店の人が体調崩してんだってさ」

僕は気が乗らないが、断る理由もないので、しぶしぶ行くことに決めた

「しょうがない行ってくるよ。」「雨降りそうだからその傘借りてくよ。駅の裏のところですよ」

「すまん。よろしく」

僕は地元に住るときから仲間四人と路上ライブをやって、こっちに來てからは1人になったからアコギで座り込み路上ライブが主だけど地元じゃ結構大きな規模でライブしてたんだ。

コーヒー豆を買ったあと、駅を通り過ぎると、いつも僕の居る場所に誰かがギターを弾いていた。

「上手い!」んともいえないふわっとした弾き方でどこかかわいらしいんだけど芯がしっかり残ってる。たとえられないそんな音色

に僕は引きつけられた。

お客もかなりいたが、その1人1人の目はもう彼女に釘付け。彼女の近くにはアロマロウソクが置いてあり、まるで集団催眠に掛かっているかのような光景がひろかっている。

一曲終わったとき（僕が聞いたところから）

ぽっ ぽちという拍手とともに冷たいものが降ってきた。

ぽっ ぽっ ぽっ

雨だ。

予想されてた通り降ってきた。その場で傘を持っていたのは僕だけで傘を開いて帰ろうとしたとき、アロマの香りが消え残っていた女の子は急いで帰り支度をしていた。

その時、ふと昔を思い出した。

僕も最初は彼女のように一人でライブをしてたんだけど、ある日の路上ライブで急に雨が降ってきたんだ。その時、傘を持ってなかった僕は濡れになることを確信して諦めてたんだけど……。

「やばーこれだけはぬらしたくないのに」

ぼやく僕の上の雨だけが次の瞬間にやんだ。

「ほら、傘さしてあげるから早く支度しなよ」

多分お客の中の一人の女性だと思われるひとがそこにいた。

「ありがとうございます。」

僕はこの日この言葉を何回くちにしたか分からない。

僕らはその後、実家の喫茶店（兄弟そろって喫茶店やってるんです）で一休みしながら意気投合していた。
これが、俺と公子との出会いだった。

第三話 春の木漏れ日、夏の匂い

僕は転勤族だった父のせいで、中学まで日本全国を転々とした。

そんな僕には友達もあまりできなかったので、ギターがいつも友達がわりだった。ギターは中学校に入学するときにおやじと一緒に買いに行った。おやじも昔は音楽を少しかじっていたらしい。

僕は来る日も来る日もギターを鳴らし歌を歌った。その間に友達という友達はできなかった。

公子と会うまでは・・・。

あの雨の日の後

俺は公子に誘われ、通っていた高校の軽音楽部に入った。ちょうど、ギターだった先輩が春に抜けたらしい。俺は高校最後の思い出しとしてこのバンドで一年を過ごすことを決心した。だが、実はクラブ活動に参加するのは初めてで、少し緊張もあった。だが、そんな思いはすぐに消し飛んだ。

毎日が楽しくて、一緒終わらないくれ、とまで思った。

キンコーン

チャイムがなり放課後になると

「けんちゃん！早く行くよ。」

いつものように公子が笑っていた。

俺はそれに笑顔で答える。

学校に慣れはじめ、公子と俺は一日中一緒に入るといっても過言でないくらいだった。それはなぜかというと、公子の家は引越しのアパートの隣の家だったからである。

あらかじめ言っておくが偶然である。

だが、彼女のおかげで、早く学校に慣れたのも事実である。

そんな学校にもなれてきて、校庭のきらびやかな花も散って彼女の笑顔が眩しくひかり、夏の訪れを感じさせる今日この頃。文化祭に向けて曲作りやら、クラス展示やらと高2の夏は大変そうな毎日が待っている予感がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286f/>

Clover Friends

2010年11月24日01時05分発行